

「おかえり」の幸せ

滋賀県

彦根市立佐和山小学校六年

新井 鈴花

「お父さんは、鈴がまだ生まれていない時に、仕事場で、大けがをしたのよ。」

何年か前に、母が話していた。昔、私の父が、仕事の中で、トラックから落ちて、こしの骨をおつて入院したそうだ。私は、そんなことはすっかり忘れて毎日を過ごしていた。

夏休みのある日、私は母に連れられて、父の仕事場へ行った。父は工場にいたのだが、私は父に会いに行くのは気が進まなかった。理由は、工場がくさいからだ。だけど、「お父さんに、顔見せてきなさい。」

と、母が私の背中をおす。かけ足で、工場にむかった私。工場の中に入ると、鉄と油が混ざったようなにおいがする。父が、

「おー、鈴、来ていたのか。」

少しどろのついた顔で、こっちを見た。

「こつちには、来るなよ、危ないから。それに、きらいだろ、このにおい。」

と、笑顔の父。ふと、刃りを見回してみると、さびついた鉄パイプ、大きな大きなタンブカー、ぶうんとにおう工場独特のいやなおい、今にもたおれてきそうな立てかけてある木の板。そして、そんな中で、せつせと仕事をしている私の父。みょうに似合っている。カチャカチャカチャカチャ、何かを組み立てている慣れた手。何だか、かっこいいと思えた。

でも、家に帰るなり、私は自分の手をこしこしと洗って、にお

いをかいでいた。においがうつっていないか、確認。いつも、仕事場に行くと、帰ってきたら、必ずする行動。

五時になって、いつものように、父が帰ってきた。あせをいっばいにかいて、あの仕事場のおいをもつて帰ってくる。

「おかえり。」

と、一言だけ言つて、また自分の世界へもどっていく私。その時、父の手にばんそうこうがはつてあるのに気づいた。ばんそうこうを見たしゅん間、私は思い出した。昔、父が仕事場で大けがをしたことを。急にこわくなった。また、父が大けがをしたらどうしよう、もしも死んじゃったらどうしよう、今日仕事場で見たくさいい父を、もう二度と見れないかもしれない。父に、不安をぶつけると、「気をつけているから、だいじょうぶ。」

と言われたけど、次の日、父が仕事から帰ってくるか、私ははらはらしていた。いつもなら、気にならないのに、時間が長く感じる私。「ガチャツ」ドアを開ける音がした。

「ただいま。」

いつものように、あせだくで帰ってきた父。私は、ほっとして、父が毎日無事に帰ってくるということが、どんなに幸せなことか分かった。夏休み、仕事をしている父が一番好きになった。あと、工場のおいがくさいなんてもう言わないよ。お父さん、これからも毎日無事に帰ってきてね。私達のために働いてくれて、どうもありがとう。